

「青いランドセル」 (後編)

部屋のドアがノックされた。

「失礼します、お坊ちゃん」

透き通った声とともに入ってきたのは、アイリーンさんだった。その手には銀色の盆を持って
いる。

アイリーンさんもまた〈御器所組〉の家族の一人だ。そして、若頭である若水さんと結婚し
て、一週間ほど前、ハネムーンから帰ってきたばかりだった。ドイツとオーストリアに行つてい
た。アイリーンさんがクラシック音楽が好きなので、モーツァルトやヴェートーヴェンゆかりの
場所を巡って来たそう。

けれど、ぼくの目線はお盆の上に釘付けになつてしまう。

——これぞ、幸福の銀色のお盆。

いつも甘いお菓子という我がエネルギーの源、至福のときが、そこには載せられてくるのだ。

——さあ、今日は何だろう？

否応なく、心拍数が増加する。

「御器所君、そんなに興奮することはないじゃないか」

もみ手をしそうな様子で、勝手にぼくのベッドの上に腰掛けた不老翔太郎ふろうしょうたろうが言った。

「御器所君、さあ、どうぞ」

「うん」

勢い込んでお盆の上を覗き込んだ。

あんぐりと口を開けた。決してよだれは垂らしていない……はずだ。

——ない！

信じられない。我が眼を疑った。

銀のお盆の上には、ティーカップが二つだけ。母さんが作ってくれたはずのヨーグルト・ム
スはどこだ？

アイリーンさんは、にっこりと笑みを浮かべた。

「今、お菓子を食べたなら、晩ご飯が食べられなくなるでしょう？ だから、お姐さまが『おやつ
はナシ』とおっしゃってました。Have a nice tea. It's "Lady Gray". 『レディ・グレイ』です」
流暢な日本語でアイリーンさんは言い、あまつさえ、ぼくにウインクすらして見せた。ちなみ
に「お姐さま」というのは、ぼくの母さんのことだ。

アイリーンさんは、ぼくに銀色のお盆を渡すと、部屋から出て行った。

かりに百歩、いや千歩、いや一万歩譲って、紅茶だけで我慢するにしても……紅茶だけで足り
るだろうか？

ぼくの内蔵は、たとえどんな量の「おやつ」を食べようとも、晩ご飯を消化できる能力がある
はずだし、それは母さんも知っているはずなんだけど。

しかも、ティーカップの脇の小皿には、あろうことか角砂糖が四つしかないではないか。
もちろん、ぼくが三つで不老が一つだろう。その点、母さんが間違えるはずがない。

「あのさ、不老は紅茶にあんまり砂糖を入れないよね」

ぼくが上目遣いで言うと、不老は大きな口を開けて笑い出した。

「なんだ、御器所君はそんなことを心配していたのか！ 実に面白い人だねえ」

いや、不老のほうが「面白い」と思うけど。

が、次の瞬間に我が両眼を疑った。不老翔太郎は、角砂糖を二つ手に取って自分の紅茶に入れたのだ。

「マジで！」

不老は涼しい顔でスプーンを手に取り、かき混ぜ始めた。

「なんてこった」

泣きたい気分だ。不老翔太郎にはとつとと帰ってもらいたい。いつたいぜんたい何が哀しくてわずか角砂糖二個入りの紅茶という、白湯同然のものを飲まなきゃいけない？

「ほお、ティ・バッグではなく、ちゃんと茶葉から淹れた『レディ・グレイ』は美味しいね！ミルクティにしても美味しい銘柄だから、今度やってみることをお勧めするね」

「ああ、そうですかそうですか」

二つの角砂糖を紅茶に放り込み、混ぜてからふうふう吹いているあいだに、あつという間に不老は紅茶を飲み干した。いつたいどういう舌を持っているのだ、こいつは。

「さあ御器所君、聴かせてもらおうかな？」

突然、不老は涼しい顔をして言った。

「そりゃ……美味しくないよ。角砂糖たった二つなんてあり得ない……」
出し抜けによく通る笑い声が響き渡った。

「ケツサクだよ、御器所君！」

間違はなく、不老は「傑作」ではなく「ケツサク」と言ったはずだ。

「さすが君は、人生のプライオリティが『食欲』だけのことはあるよ！ 僕が訊いているのはお盆の上のお菓子じゃない。わかってるだろう？」

全身のあらゆる汗腺という汗腺から、イヤな汗が吹き出した。

「無論、糖分は脳の活動に必要なエネルギー源だ。さあ、ぜひとも御器所君の推理を拝聴したいものだね」

その「もみ手」は、ほんとうにやめてもらいたい。

「そんなことよりも、不老は、何か突き止めたの？ 萱場先生を追いかけていつたけど」
わざと口を尖らせて言ってみたが、この男にはさして効果はなかったようだった。

「おっと、いい指摘だね。忘れるところだった。危うく〈御器所組〉組長の長男からカツアゲするところだったよ」

不意に不老はポケットをまさぐると、千円札数枚と小銭、それに一枚の紙片をぼくに手渡した。

わけがわからずにいると、不老は相も変わらず涼しげな顔で、

「ごめん、若干、多いと思う。確認してくれたまえ」

「へ？ 何が？」

「帰り道は、ちゃんと領収書もらっておいたんだよ。タクシーで初乗り料金だけだったから、運転手さんは不満そうだったけれど……面白いものだね」

不老は思い出し笑いをした。

「あのお、何かおかしなことがありますかね？」

精一杯の虚勢を張って皮肉をかましてみた。

「タクシーで『領収書ください』と言うのはおかしくないだろう？ やっぱりランドセルを背負っているのは大きなハンディだね。でも、この正門まで戻って来て、宛名に『御器所組』でお願いします」と言ったら、いそいそと手の裏を返すように書き込んで『おつりはいいです』

なんて、敬語を使うんだ。実に興味深いよ」
なんてこった。

そりゃ、確かにうちの組と関係のある人間だと知ったら、タクシーの運転手さんは逃げ帰るだろう。下手をすると「料金は要りません」とまで言いかねない——というシチュエーションをまったく理解していない不老翔太郎に、毎度のことながら呆れてしまう。

「そうそう、『手の裏を返す』と僕は今言ったけれども、世の中では『手のひらを返す』という誤用が蔓延している。おっと、言語というものは常に変化するものだからね。僕は決してその『誤用』が悪いとは思っていないんだよ」

大きくため息をついた。こいつの意味不明瞭な言葉の弾幕は何とかならないのか……と思う。が、おそらく何ともならないのだろう。

ぼくの財布からスリ取った五千円のおつりを、無造作にデスクの上に置いた。

「確認しないでいいのかい？」

不老は怪訝そうに訊いた。

「不老を信じてるから。それとも……まさか、ネコババした？」

「信じてる……なるほど」

突発的に不老翔太郎の表情が深刻なものになってので、ぼくは少々焦った。

「ど、どうかした？」

「御器所君は、僕を信じているんだね。面白い」

「何が面白いの？」

「今まで、そんな人間は僕の周囲に存在しなかったからねえ」

不意に不老は真顔で黙り込んだ。

そんなことを言われたら、ぼくは話の穂を継ぐことができないうじゃないか。

ややぬるくなった紅茶を、一気に飲み干した。苦い……とは言わないけれど、少なくとも美味しくはない。

それ以上に、居心地が悪い……。

妙な沈黙が、十七秒ほど続いた。その後、不老翔太郎は大きな声で笑い出した。

「さてさて、御器所君の『青いランドセル事件』の推理をぜひとも拝聴したいものだねえ」

不老は勝手にぼくのベッドの上に腰掛け、その長い脚を、これ見よがしに組んだ。

どこまで人の精神を波立たせるんだ、この不老というやつは。

「推理っていうほどじゃないけど……『青いランドセル事件』の犯人は、わかった。それは……」

わざと、ぼくはタメを作って、じつと不老を見やった。

不老翔太郎は、表情ひとつ変えなかった。幾ばくかの勝利感を胸に、ぼくは立ち上がった。

そして、不老に向かって、はつきりと言った。

「犯人は……萱場先生だ！」

またしても、長い沈黙。

二十三秒までは数えたが、それ以上はやめた。

完全に不老の鋭利な沈黙に飲まれそうだったが、今のぼくは違う。虹色の脳細胞が激しく活動しているのだ。

「事件の真相は、実に単純なんだよ、不老！」

ぼくは勢い込んで言った

「ふーん、そうだろうねえ」

いちいち口を挟まないでもらいたい。

ぼくは気を取り直して続けた。

「『青いランドセル』が物色されたのが、なぜ体育の時間に限られているのか？ それがまさに発端なんだ。だから、そこから推理を進めれば、おのずと答えは明らかなんだ」

「ほほう、なるほど？」

眼を見開いた不老に向かつて、ぼくはにやりと笑みを向けた。

なんという優越感か。

そして、ぼくは長い長い学校からの帰路に、我が虹色の脳細胞を輝かせながら導き出した真相を、順を追って不老翔太郎に解説した。

——こんなに気持ちのいいものなのか！

ぼくは胸を張り、ベッドに腰掛けた不老翔太郎を見下ろした。

背筋がぞくぞくするこの快感。なるほど、「名探偵」とはこういうものだったのか。

名探偵は、一度やったら、やめられない。

ぼくは、長い帰路で考えた推理を不老にすべてぶつけた。

「——という真相だったんだ。だから萱場先生に直接、ぶつかってみるしかない！」

ぼくは両手の拳を腰に当てて、ド変人・不老翔太郎を見下ろした。

またしても長い沈黙。

不穏な予感が左のこめかみから右のこめかみへと走るのを感じた。しかし、ここでこいつに負けてはいけない。自分の虹色の脳細胞を信じろ。あえて胸を張った。

——どうだ、不老。

と言おうとしたそのときだった。

「ぐう」

「はいい？」

「言って欲しいんだらう？ 『ぐうの音も出ない』と」

思わず言葉を失う。

「残念ながら、いくらでも言えるね。『ぐう、ぐう、ぐう、ぐう……』。なぜなら君の推理とやらには、決定的な瑕疵があるからだよ」

「お菓子なんか、どこにもないじゃないか！」

不老翔太郎は、ぴくり、と右の眉を上げた。

「僕はいたって真面目なだけどねえ。茶化してもらっては困る」

「それはこっちの台詞！」

そこで、不老は聞き慣れた、わざとらしく大きなため息をついた。

「いいかい、君は根本的にスタート地点を間違えているんだよ。まだ気づかないかな？ ぼくの虹色の脳細胞に、これ以上何を気づけというのか？」

不老翔太郎は立ち上がった。そして、ぼくを見下ろして、ゆっくりと言った。

「『青いランドセル』は、体育の時間に物色されたんじゃない」

空白——不老の発した言葉の意味を理解するのに、たつぷり六秒はかかった。

「へ？」

その結果、出てきたいつもの間の抜けた声。

不老は、その長身でぼくを見下ろして、口角を上げた——笑ったのだ。

「そんなことよりも、僕の話を聴きたくないかい？」
不老は言い放った。

「ちょ、ちよつと待った。まったく意味がわからないんだけど。『体育の時間』じゃなかったら、いったいぜんたいいつ『青いランドセル』が狙われる事件が起きたんだ？」

不老翔太郎は、表情を一ミリたりとも変えなかった。

「似て非なるものさ。『体育の着替えの時間』だ」

「へえ？ 結局、体育の時間ってことじゃないか」

「御器所君、もう一度言うよ。体育の『着替えの時間』だ」

まさにこれが「ぐうの音も出ない」というやつか。ぼくの口のなかはカラカラに乾いていた。

「まさか、君はほんとうに体育の『授業の時間』に何者かがランドセルを物色したと思っっているのかい？ この学校のセキュリティを見たり、不審者が外部から侵入することは不可能だ。ならば内部犯行ということになる。が、残念ながら、御器所君の推理は穴だらけだ。『推理』とも呼べないただの『憶測』——いや『妄想』といったほうがいいかな」

椅子にへたり込んだ。ここで甘いものがあれば、少しは救いになるんだろうけど……今は、ない。

「けれど、君の言ったことでたつた一つ、大いに的外れだけれど、大いに関連することがある」
「もう勝手にしてくれよ、不老」

その瞬間、絶妙のタイミングでぼくのおなか「ぐおるるる……」と鳴った。

この場に金銀河がいなくてよかった、と心底から思った。と同時に、心底からの空腹がぼくの胃袋を締め付けた。

「あのお、もう晩ご飯の時間が近いんだけど……」

不老翔太郎は、今度は左の肩を上げた。器用なやつだ。

「ほほう、じゃあ、君は樋口一葉の行方について知りたくないのかな？」

「樋口一葉？ あ、お金なら、いいつてば。ちゃんとお釣りもらっているし——」

「お釣りじゃない。僕が何のために使ったのか、知りたくないのかい？」

そんなことを言われたら、知りたくなるに決まっている。不老はすかさずぼくの顔色を読んだようだ。

「萱場先生がすぐにバイクを停めたから、タクシーの初乗り料金だけで済んだよ」

「か、萱場先生だって？」

「ほかにどの先生が関わっているっていうんだい？」

すっかり混乱した。

不老翔太郎は、さつき、ぼくの「推理」を全否定したばかりじゃないか。どうして、また萱場先生が登場してくるんだ？ ぼくの脳味噌はすっかり混乱した。脳細胞の活性化には糖分が必要だけど……ここには何も無い。

ぼくはただうなだれるだけだった。

「じゃ、萱場先生は、やっぱり学校の不正の証拠を手にして、誰かに狙われているっていうこと？」

「三分の一……五分の一くらいは正解かな。御器所君、君にしてはいい成績だよ」

余計なお世話だ——この台詞をいったい何度、こいつに向かって心ななかで吐き出したことか。

「じゃあ、萱場先生は学校を出たあと、どうしたの？」

「知りたいかい？」

「当たり前だよっ！」

ぼくは一歩前に出た。

不老の話を要約すると、以下のようなものだった。

不老は、萱場先生がいつも通勤に使っている二五〇cc中型バイクで学校を出たのを確認した。

先生ならば、事業が終わっても、ノートをチェックしたり、小テストの採点をしたり、ぼくらにはよくわからない教育委員会に提出するための書類を書いたり……何かしらの仕事があり、遅くまで残っているものだ。

が、どうやら萱場先生は、すぐさま職員室から学校の外に出たようだ。以前にも、同様の「事件」があつたことを思い出した——もつとも、それは萱場先生自身が「事件」の解決に駆け回っていたのだが——それはまたべつの話だ。

そのとき、意外なことが起こった。

萱場先生を待ち構えているかのように、一台の1000ccクラスの大型バイクが、萱場先生を追い始めたのだ。

萱場先生を尾行し始めたのは、上下を赤いライダー・スーツを着込んだ男だった。バイクも赤、もちろんフルフェイス・ヘルメットも赤い。顔までは見ることはできなかったが、明らかに、身長百八センチを超えて肩幅の広い体格の男だった。

さて、不老はというと、ちょうど見事なタイミングで学校の前の道を通りかかったタクシーを拾うことができた。

そしてあろうことか、信じがたいけれど、ホントにこの不老というやつは、

「あのバイクを追って下さい」

と本気で言ったらしい。

不老の言葉を聞いたタクシーの運転手さんもまた、よほどのお人好しだったようだ。よくぞランドセルを背負った子どもの言うことを聞いたものだ。もつとも不老翔太郎は、ランドセルがなければとても小学生には見えないけれど。

しかし、不老の追跡も長くは続かなかつた。

十分も進まないうちに、萱場先生のバイクは路肩に駐車した。真つ赤な大型バイクに尾行されていることに気づいたのだ。もつとも、気づかないほうがおかしいとは思うけれど。

赤いバイク大型バイクもまた、停車した。

不老翔太郎の言葉をそのまま使うならば、尾行者も「気づかれることを期待していた」らしい、らしい。

不老は、あえて2ブロック先までタクシーを走らせて、運転手さんに料金——初乗り料金のみ——を支払って跳び出したときには、すでに萱場先生はバイクを降りて、真つ赤なライダーにかつかかと歩み寄っていたという。

もう、何が何やら、ぼくは混乱するばかりだ。

不老は、萱場先生に気づかれないう、わずか十五メートルほどの距離まで近づいたという。いったいぜんたいどんな方法でそんなことができたのか……いや、不老翔太郎というやつならやりかねないな、と思った。

そして、不老は、萱場千種先生と、先生を追いかける深紅のライダーとの会話の一部始終を聞

いた。

萱場先生は、深紅のライダーの正体を知っていた、という。萱場先生は、フルフェイス・ヘルメットをかぶった深紅のライダーに向かって、はっきりと言った。

「無駄な追いかけてこはもうやめにしない、平針君？」

すると、長身の男は、ゆつくりと真つ赤なフルフェイス・ヘルメットを脱いだ。

年の頃は、三十代半ばから後半か。ほぼ萱場先生と変わらないだろう。

肩までかかろうかという、男にしては長い髪はややウエイヴがかかっている。よく日焼けして健康そうな肌。目鼻立ちをはっきりして、鼻筋がよく通っている——不老曰く、「ギリシャ彫刻」のような顔立ち、とのことだ。

何をもって「ギリシャ彫刻」と呼ぶのかわからないけれど、まぎれもない事実は、この「平針」と呼ばれた男、間違いなく「ザ・二枚目」。今どきの言葉を使えば「イケメン」以外の何者でもない、ということだ。

以下、不老翔太郎から聴いた話をもとにその場を再現してみる。

男はバイクのスタンドを立てると、ゆつくりと大腿で萱場先生に近づいて行つた。

「無駄な追いかけてこではないさ。単に君が逃げ回っているだけじゃないか、千種^{ちくさ}」

「ずいぶんと馴れ馴れしいのね」

「君と俺との仲なら、さして馴れ馴れしいとは思わないな。さあ千種、もう逃げるのはやめて、ちゃんと答えてくれ」

そこで萱場先生は、大きくため息をついた。

「この前言ったとおり。変わりはありません。何も答えることは、ありません」

「俺は納得のいく説明が必要だ、と言つたはずだぜ」

言いながら、男はさらに一步、萱場先生に歩み寄つた。

「説明なんか要らない。あなたの勝手な思い込みでしょう？ それに——」

「それに、何だい？」

さらに平針という男は萱場先生に近づいた。萱場先生は、じつと男を見返して、はっきりとした口調で言つた。

「変わったわね、平針君^{ひいひつ}」

「君付けなんて、他人行儀じゃないか。それが今の俺のなんだ。君は、何かを恐れているんじゃないのか？」

一瞬、萱場先生が言葉を飲み込んだ。

「な、何を？」

平針という男はそのまま萱場先生の両肩を掴み——

「で、で、で、どうなったの？」

ぼくが身を乗り出すと、不老はぼくのベッドに深々と腰掛け、もったいぶつた口調で答えた。

「大人の男女のこのようなシチュエーションだ。わかるだろう？」

いや、全然わからない——と言おうとしたとき、さきに不老翔太郎が軽い、あまりにも軽い口調で答えた。

「接吻したのさ」

「せ、せ、せつぶん？ つまり……つまり、えーと……」

「『口づけ』、『キス』、『チュー』……何とでもご自由に」

想像できない。

モテないことで職員室の笑い者になつていると噂が生徒にまで漏れ聴こえている萱場先生が、イケメン・ライダーと、あろうことか屋外でキスをしていたとは……ぼくの虹色の脳細胞をどれだけ働かせても、その映像が浮かんでこない。

「で、二人はどうなったの？」

「はじめて見たね、『ガラスの顎』というものを」

「『ガラスの顎』って？」

萱場先生は、唇を奪われるや否や、次の瞬間には平針を突き放した。

そして、一瞬後には平針の顔面を一撃したという。平手ではなく、拳で。

「見事な正拳突きだったなあ」

不老は、心底感嘆した様子で言った。

「動きが無駄がないんだ。人間が右手でパンチを繰り出すとき、必ず体幹の左側が一瞬、前に出る。上体を捻るんだ。しかし、萱場先生にはその無駄な動きがない。空手というより、合気道に近い技だったね。あれはいつたいたいという武道かな」

「い、いや、そんなことじゃなくて……殴ったの？ 男の人を？ 素手で？ 萱場先生が？」

で、相手はどうなったの？」

虹色の脳細胞はパチパチと火花を散らし始めた。ダメだ、どうしても不老翔太郎の突飛な思考にはついていけない。

「実に興味深い。なぜ、御器所君は倒置法を好むのか……これは、一考の余地があるかもしれない」

「何だよ、トーチホーって、火災報知器の会社？ どうでもいいんだよ、そんなもの。で、殴られた平針とかいう男はどうしたの？」

不老は、日本人には決して真似のできない——真似をしたら恥ずかしい——両肩をすくめる、という動作をやつてのけた。

「倒れているあいだに、萱場先生はバイクに乗って行ってしまったよ」

そして、不老のしている前で、平針と呼ばれた男はゆっくりと起き上がった。バイクに戻りかけると、そこで歩を止めた。そして、言ったのだ。

「なあ、君。ほら、タバコの自販機の陰にいる君のことだよ」

不老は凍り付いた。

「尾行も、覗き見も、盗み聞きも、もつと上手にやらないといけないな」

男は言った。

不老翔太郎は、タバコの自動販売機の陰で、固まっていたという——ぜひともその姿を見たかった、なんてことはもちろん不老に直接言ったりしない。

「君は探偵気取りのようだ。しかし、まだまだ学ぶべきことは多い。おそらく千種……いや、萱場先生からは学べないだろうがね」

男は肝腎の不老が隠れている自動販売機に眼もくれず、地面に一枚の紙片を置いた。

「俺の名は平針左京」

「僕は、不老。不老翔太郎です」

「不老君か。覚えておこう。君とは、また会うような気がする」

そして深紅のヘルメットをかぶり、大型のバイクにまたがると、爆音を立てて走り去った。

「ほんとうに心底参った……」

さして参った様子を見せずに不老は言った。

「僕の尾行はすべてお見通しだったんだよ、この平針左京という人物に。端倪すべからざる人物だね。無論、その男を一撃でK・Oした萱場先生もタダ者ではないけれどね」

不老は、ズボンのポケットから一枚の名刺を取り出した。

——探偵・興信 平針左京調査事務所

名刺にはそう明記されていた。

「た、探偵？ 本物の？」

「日本には『探偵免許』という国家資格は存在しない。自らが『探偵』と名乗れば、誰だつて

『探偵』さ」

「でも……どうして萱場先生を探偵が追っていたんだ？」

「さあ、それはわからない。しかし、二人が相手を呼ぶ呼び方から、以前からの知り合い——それもかなり親しい仲だったことがわかるだろう？」

確かに不老の言うとおりで。

「平針左京っていう男は……萱場先生のストーカーなのかな？」

「そう決めつけるには早計だよ。実際に、何らかの『調査対象』として萱場先生を追っていたのかもわからない」

「調査対象……」

またもや、ぼくの虹色の脳細胞が輝き始めた。

つながった。

「やっぱり、萱場先生が学校の不正の証拠を握って——」

突然、不老翔太郎は爆笑した。心底から楽しそうに、

「まだそんなことを言っているのかい？ 言ったはずだ、君の『推理』とやらは、『妄想』に過ぎない、と」

「でも、萱場先生が——」

「おっと、これは悪い癖だな。君だけじゃないけれど。確かに『青いランドセル事件』と、萱場先生が平針左京とやらに追われていることには、大いに関係がある」

「だったら——」

ぼくの言葉はことごとく遮られた。

「御器所君、悪い癖とはまさにそこさ。僕は『相関関係』があると言っている。一言も『因果関係』があるなんて言っていない。その両者を混同すると、手痛い失敗をすることになる」

不老は、ゆつくりとぼくのベッドに戻り、腰掛けてその長い脚を組んだ。

ぼくは必死に虹色の脳細胞を回転させたつもりだったけれど「インガカンケー」だの「ソーカンケー」だの、悔しいかな、虹色の脳細胞はすぐに漢字変換してくれなかった。

「あのさ、結局、要するに、何を知ってるんだ？ 『青いランドセル事件』について」

「御器所君とたいして変わらないうよ。ただし、今回の尾行の失敗から、謙虚さを学んだ」
いや、全然、謙虚になつていないと思う。

ぼくは、虹色の脳細胞をフル回転しながら、おそろおそろ言った。

「つまり萱場先生は……今回の『青いランドセル事件』に関係している。けれど……えーと、でも、事件の犯人じゃない……つていうことでもいいんだよね」

「あれ？ そう言わなかったかな？」

不老翔太郎の数えきれない無数の欠点の一つは、自分が嫌味を言っていることを自覚していな

い、つてことだ。ぼくは苦い何かを飲み込んだ。

「じゃあ、『青いランドセル事件』は——」

言いかけたとき、ぼくの携帯電話が鳴り出した。

——発信者 金銀河

急に体が熱くなり、汗が額ににじんだ。嬉しさと同時に、心底不愉快な記憶が甦って来た。

「あ、もしもし、どうしたの？」

「ねえ、何かわかった？」

「何かって？ 何？」

電話の向こうで大きなため息が聴こえた。

「まさか御器所君、今までぼけーつとしてたの？」

「い、いや、してないよ。ちゃんと……えーと、推理したよ」

もつとも、その「推理」は不老翔太郎によつて、ほぼ全否定されたのだけど。

「それで、萱場先生はどうだったの？」

「え？ 萱場先生？ やつぱり、萱場先生が関わっていることに気づいたの？」

まさか、金銀河もまた、ぼくと同じ結論に達したのだろうか？

「御器所君、あり得ないとは思うけど、萱場先生がランドセルを探った犯人だなんて考えてないでしょうね」

「も、もちろん、そんなこと、ま、まさか……思っていないよ」

電話の向こうで、金銀河がわずかにくすつと笑ったように聞こえた。

ただそれだけで、ぼくの顔に血が集まってくるのがわかる。電話越しの会話でよかった、と心底思った。こんなに赤面して、暑くもないのに汗をダラダラと流している姿なんて、金銀河には見せたくない。

「えー、萱場先生は、その、今回の事件には全然——」

汗を流しながら必死に言葉を探していると、携帯電話から、ぼくがもつとも聞きたくない言葉が飛び出した。それは、ぼくの鼓膜を振動させて聴覚神経を激しく揺さぶった。

「そこに不老君いるんでしょ」

これがかもしも漫画だったら、「ガクツ」とぼくの両肩が落ちる音が描写されるはずだ。

「あ、やつぱり……はい……わかりました……」

もう泣きそうな思いで携帯電話を握りしめた。不老に向かって突き出した。小声で不老にささやいた。

「どうして銀河さんが、不老が調査していることを知ってるんだよ？」

不老は表情ひとつ変えなかった。

「銀河さんに頼みごとをしたからだよ」

「どうやって？ 学校を出てすぐに分かれて……それつきりだったじゃないか」

不老は無言で手を差し出した。

「御器所君は触れたことすらないかもしれないけれどね、この日本には『公衆電話』というたいへんに便利な設備が存在するんだよ。ずいぶんと数は少なくなっただけだね」

「でもどうやって電話したの？」

不老は、わざとらしいため息をついた。

「ああ、僕の記憶力がそんなに低く思われていたのなら、いささかショックだな。君と銀河さんの携帯電話の番号くらいは覚えられるよ」

返答できない。ぼくは、自分の携帯電話の番号すら忘れてしまう。不老はぼくから携帯電話を受け取った。

「もしもし……うん、なるほど、やっぱりそうか。ありがとう、大いに助かったよ。じゃあ銀河さんは、もう何もしなくていいよ。そう、何もしないほうがいい」

不老は、唐突に携帯電話をぼくに放り投げてきた。慌ててキャッチし損なった。床に落ちた携帯電話を拾い上げた。

祈るような気持ちで電話に向かって言った。

「もしもし……」

沈黙。

一生、不老を呪ってやる——と思つた瞬間に、電話の向こうから天使の歌声のような金銀河の声が聞こえた。いや、まったく歌ってはいなかった。

「ねえ、御器所君、今のは何？」

「いや、あの、ぼくは何もしてないよ……無罪です。不老が携帯を落としたの」

「まったく人の気持ちかわからない馬鹿野郎ね」

同感だが、金銀河の口から「馬鹿野郎」という単語が出てきたことも驚きだ。

「誰が……？ それ、ぼくじゃない——」

「御器所君、ちゃんと梓あずさに連絡してる？ メールとか、電話とか？」

一瞬、脳が空白になる。ぼくの虹色の脳細胞が色を失つてモノクロになる。

梓というのは、べつの小学校に通っている、本郷梓のことだ。ひよんなことから、金銀河とは塾の友だちである、本郷梓と知り合うことになった。さらに、本郷梓の身に降りかかった「事件」に関わったこともある——べつの話だけだ。

「はいい？」

結果、出てくるのはこんな声だ。

次の瞬間、金銀河の怒りのこもつた声がぼくの脳味噌を揺さぶつた。

「ほんつと、男子つて馬鹿ぼつか。ガキぼつか！ 信じられないっ！」

捨て台詞の残響を残して、電話は切れた。

ぼくは携帯電話を手にしたまま、床にへたりこんだ。

「なんてこつた……」

今度こそ、ほんとうに修復不可能なほどに、ぼくと金銀河の関係はバラバラに破壊されてしまった。

それもすべて、眼の前の不老翔太郎のせいだ。

その不老はというと、笑顔で言い放つた。

「さて、必要な事実はほぼ得ることができた。帰るとするよ」

「ちよつと待つた！ 何もわかってないじゃないか！ 『必要な事実』って何だよ？」

「野並さんさ」

ぼくは必死に自分の脳細胞を回転させた。たつぷり二分ほどかかつて、ようやく思い出した。そうだ、「青いランドセル」を持っている女子の一人だ。もう一人の高辻美宇には、すでに話を聞いている。

「野並さんが……どうなつてるの？」

不老は、わざとらしく肩をすくめた。

「銀河さんに、僕の代わりに野並のなみさんの通う〈みどり児童合唱団〉に、調査に行ってもらったん

だよ」

「調査？ だったらばくが行ったのに」

「残念ながら、御器所君には女心というものがわからないからねえ」

男のおまえに言われたくない、と思いつながら、ぼくも必死に抗弁した。

「で、野並さんは……」

「ランドセルを物色された様子はないそうだよ」

不老は退屈そうに答えた。

ぼくは、堪忍袋の緒が切れそうだった。ぐつと感情を抑えた。

「結局、何もわかってないじゃないか。『青いランドセル事件』の真相も、萱場先生と平針ナントカって探偵の関係も！」

「確かに後者は、謎のままだ。けれど、『青いランドセル事件』について頭を巡らせても、意味なんてないさ。さつき電話で銀河さんに言つたとおり、『何もしない』のが最前の解決策。いや、すでに解決しているけれどね。それじゃ……」

「解決した？ ねえ不老、まさか『失敬』って言って帰る気じゃないだろうね？」

「おっと、珍しく御器所君に先を越されたなあ。ところで、明日は体育の授業があつたづけ？」

「ええと、明日はない。明後日の三時間目が体育だけだ」

不老はまるで肩こりをほぐすかのように首をクキクキと左右に曲げると、

「じゃ、お言葉に甘えて、『失敬』」

「はあ？」

不老は、手のひらをひらひらさせ、無言で「見送りは無用」とばかりに——しかし、うちの「若い衆」は全員で整列して見送るだろうけど——部屋を出て行った。

絶対に、不老を許さない。

ホントに呪ってやる。絶対に、子の刻ねに藁人形ねに五寸釘を打ち込んでやる。あ、でも藁人形がない、というか、藁がない。我が家に藁があつたづけ？ と思つていたら、ノリ兄ちゃんが「晩ご飯ができたよ」と知らせに来てくれた。

母さん手ずからの晩ご飯を食べたら、半ば予想していたけれど、急速に睡魔が襲いかかつてきた。とりあえず、どうしても気になることは若水さんに伝えた。それが正しいのかどうかわからなかつたけど。

そのまま九時前にベッドにへたりこみ、もちろん、子の刻には熟睡していた。藁人形も、五寸釘も準備することを忘れて、朝までたつぷりと惰眠をむさぼつた。

教室に入ると、すでに登校していた金銀河が、つかつかとぼくに歩み寄つて来た。本来ならば喜ぶべき状況なのだろうけど、昨日が昨日なので、ぼくは身の縮む思いだった。

「ねえ御器所君、いったい不老君は何を企んでいるの？」

「企むって……べつに何も。当然『青いランドセル事件』を……」

「まだそんなこと言ってるの？」

両手を腰に、見下ろされると、ぼくはもう顔を上げることができない。

「不老君、萱場先生の後を追いかけて行つたでしょ。何があつたの？ 何を見つけたの？ さあ白状しなさい」

ぼくは、一度わざとらしく咳払いをすると、金銀河を見上げた。

「……くそつ、やっぱり美人だなあ……。」

なんて気持ちは押し殺し、ゆつくりともつたいぶつて言った。

「おかしいね。不老は、ぼくには話してくれたよ。学校から出た萱場先生を、バイクで追いかける男がいたんだよ。」

金銀河に対して、珍しく優越感を抱きながら言った。

「あれ？ 聴いてないの、不老から？ ふーん、ぼくは聴いたけど。」

「わたし、聴いてない……。」

心なしか、金銀河の声が沈んだように聞こえた。ぼくは慌てた。同時に、どういうわけか、罪悪感を覚えた。

「あ、あのね……えーと、不老のやつ、勝手にぼくから五千円盗んだんだよ。まあ、あとでお釣りを返してもらったけど……。」

ぼくは、不老から聴いた「平針左京」と名乗る男についての一部始終を、金銀河に話した。

「……怪しい。」

金銀河がつぶやいた。

「不老のやつ、平針左京に痛いところ突かれて、へこんでるみたいだよ。」

「ひどい、御器所君。友だちがへこんでいるのを喜んでるみたいじゃない。」

金銀河が、液体窒素並みに冷たい視線をぼくに突き刺した。

「いや、そんな……喜んでるなんて……。」

不意に、背後から声が聞こえた。

「銀河さん、御器所君をいじめちゃいけないな。もつとも、銀河さんの気を引こうと、僕がへこんでいる、なんてデマを流した御器所君の自業自得でもあるんだけどね。」

ひょうひょうとした様子で教室に入ってきたのは、不老翔太郎だった。へこんでいるどころか、逆に自信で膨れ上がっているようだ。

「……まったくなんてこった。」

机に突っ伏した。

「不老君、その平針とかいう男の人……。」

金銀河が言いかけたときだった。教室の前のドアが開き、萱場先生が入ってきた。

「はい、みんな席に着きなさい。」

いつもと変わらぬ様子に見えた。とても、男を一発の正拳突きでノックアウトできるような先生には見えない。

結局、ぼくと金銀河は、不老から何も聞き出すことができなかった。

そのときだった。

チャイムが鳴った。

またしても、萱場先生は、始業時間よりも早く教室に現れたのだ。

午前中の授業は、いつも通りにつつがなく、問題なく過ぎた。いや、確かに萱場先生は、二時間目の「社会」の時間のチャイムが鳴って五分以上も教室に現れなかったり、三時間目の「算数」では単純なかけ算を間違えたり、四時間目の「国語」では漢字の書き間違いを三度やらかした……まあ、それは、いつも通りの萱場先生といえればいつも通りである。

けれど、普段なら気にも留めないけれど、昨日の不老翔太郎の話聴いてしまったあとでは、

どうしても気になってしまふ。

やっぱり、平針左京という「探偵」のせいで、萱場先生は心穏やかではないのだろうか？ また今日も、平針左京は萱場先生をバイクで追いかけるのだろうか？

それともただ単に、いつもの萱場先生のおつちよこちよいなのだろうか？

そんなことを考えているうちに「国語」の時間が終わり、学校でもっとも幸福なとき、つまり給食の時間になった。

メニューは、実を言うと、覚えていない。ただ、一気に空腹を満たすことができたのは間違いない。風邪で欠席した生徒が二人いたので、その分のご飯もおかずもおかわりできたのだ。

満足しつつ、半分心地よい睡魔に襲われつつ、午後の授業が終わった。ずっと寝ぼけていたので、萱場先生が午後になんかやらかしたのか、よく覚えていない。

授業後の掃除、その後の「帰りの会」には、チャイムから萱場先生は十二分遅れて教室に現れた。そのあいだの教室内の騒乱は、ここには書きたくない。

——なんで、みんな（いい意味でも悪い意味でも）こんなに元気なんだろう？

つくづく不思議に思うような混沌が教室内に充滿する。こんな騒音のなかだけれど、ぼくは寝たふりをしていた。

萱場先生が教室に来れば、とりあえずは多少、静かになる。

ぼくは萱場先生の顔をうかがったけれど、やっぱり、いつもどおりの萱場先生に見えた。だから、とりあえず何ごともない平穏な一日だった——とぼくは思った。

けれど、そうは思わない生徒もいた。

特に連絡事項もないまま「帰りの会」は終わり、めいめいが帰宅の準備を始めた。

ぼくも、脳味噌はなかなば眠ったまま、ランドセルを背負って、機械的に教室を出て昇降口に向かった。

靴を履き替えているときだった。

「痛っ！」

思わず声を上げた。左の二の腕を全力で張り手で叩かれた。「ぱちいーん」という見事な音が響き渡ると同時に、ぼくの二の腕の贅肉が揺れた。

これで眼が覚めないワケがない。

振り返れば、あろうことかそこには金銀河が立っていた。いつも金銀河に見下ろされる立場のような気がする。

しかし、今度の金銀河の表情は、笑みに満ちていた。

「御器所君、三組のこと気にならない？」

「へ？ どうして？」

いつも以上に、なかなば寝ぼけているぼくはそんな声しか出せない。

「ああ、もうサイアク。話にならない」

金銀河があきれ顔で離れていくので、ぼくはすぐに立ち上がった。

「もしかして、『青いランドセル事件』？」

「もしかしなくても、それしかないでしょ」

「どうして三組？」

ぼくは首を伸ばして、隣の三組の下駄箱のほうを見やった。

「もう行っちゃった」

「誰が？」

ぼくの問いに、金銀河は大きな大きなため息を返し、すぐさま靴を履いて、昇降口に向かった。

ぼくは慌てて追いかけた。

いつもは正門から登下校しているけれど、我が小学校には、もう一つ、「北門」がある。そちらからだと遠回りになるので、ぼくは今まで一度も使ったことがないけれど、金銀河は北門に向かっていた。いつも、ぼくと同じように西にある正門を使うはずなのに。

——でも、どうしてぼくが金銀河を追いかけるべきやいけない？

急激に恥ずかしくなった。血液が頭へ流れ込む。顔が火照る。

職員室や校長室などの入った「北校舎」別名「管理棟」と体育館とのあいだにあるのが北門だ。こちら側を利用する生徒は少ない。

だから、すぐに金銀河の姿を見つけることができた。体育館へと続く渡り廊下の柱に身を隠している様子だ。

声をかけようとしたときだった。

まさに北門から出て行こうとする二つの後ろ姿が眼に入った。

一人は、髪が短い、ピンク色のランドセルを背負った女子だった。顔まではわからない。そしてもう一人は、青いランドセルを背負った男子——後ろ姿でも、それが熱田博和あつたひろかずということにはわかった。

「思ったとおりね」

「へ？ 何が？」

金銀河はぼくの存在など気づいていないかのように、柱の陰から出て、北門から出て左に曲がった二人の後を追いつつ始めた。

門の脇でもう一度止まると、金銀河はうなずいた。

「『のりみか』かあ、やっぱり」

「誰？」

ぼくは訊いた。

「三組の則武美花のりたけみかさん。のりみかつて熱田君と同じ絵画部だから、もしかしたら、と思つてただけど、やっぱりね」

「やっぱり、つて何が？」

そのとき、背後から聞こえた声に、思わず飛び上がりそうになった。

「ずいぶんと仲がよろしいようだね、御器所君と銀河さんは。しかも、『野暮』という点で共通している。そういう意味では、いいコンビかもしれない」

不老翔太郎だった。

「な、仲がいいなんて……どうしてわたしが御器所君と……」

狼狽している金銀河は間違いなく綺麗だったが、ぼくは金銀河以上に慌てふためいていた。

「な、な、な、なんで……」

「そうよ、不老君こそ、陰でこそそとわたしたちを追いかけて……」

言いかけた金銀河は北門の外を見やり、短く「あつ」と声を上げた。

ぼくも、金銀河の声に引つ張られるように、北門から熱田博和と則武美花の後ろ姿を覗き見た。そう、それはまさに覗き見だった。

二人は、どちらからともなく手を伸ばし、その手をつないだ。

「お幸せに」

すつかり立ち直った様子の金銀河が微笑んだ。

「ほんとうに野暮だねえ。くれぐれも人の恋路の邪魔をしないように願いたいな」

不老は、熱田たち二人を見ようとはせず、北門にもたれかかり、腕組みをしていた。

「あの……さつきから、まったくわかってないのは、もしかしてぼくだけ？」

おそろおそろ言うのと、

「もしかしなくても、そのとおりにね」

金銀河のミもフタもない返答。

「いったい、いつわかったの？」

「最初に川名君が、青いランドセルに物色された形跡がある、と言い出したとき、その十分後には、少なくとも、何者かが探している『標的』のランドセルは熱田君のものだとわかったよ」

「どうして？」

不老は、肩をすくめた。何度見ても、不愉快な仕草だ。

「青いランドセルを持っている生徒だけ、『狙われた』んだ。自分が同じ青いランドセルを持っていたら、怖く感じるか、腹を立てるか、何らかの感情を覚えるに違いない。ところが、熱田君はまったく冷静で我関せず、といった様子だった。つまりその時点で、熱田君は受け取っていたのさ。それにもう一つ、熱田君の座席だ」

「はあ？」

「まだわからないかな。僕は言ったはずだよ。今回の事件の発端には、萱場先生が関わっている、と」

「そうだ、もともと犯人が萱場先生が犯人だと言い出したのはぼくだった。ぼくの虹色の脳細胞の推理は、不老に全否定されたけれど。」

「まだわからないかなあ。今回の『事件』とやは、そもそも萱場先生の気まぐれな席替えがきつかけだったんだよ」

「席替え？」

「いいかい？ 席替え前と後で、まったく偶然にも同じ席だった人がいる——それが、熱田君だ」

言葉を失う。虹色だったはずの脳細胞を必死に使って思い起こせば、確かに熱田博和の教室内での位置は変わっていないような気がする。

ぼくの疑問を口にしたのは、金銀河だった。

「つまり、熱田君はちゃんと受け取っていたはずなのに、それを隠していたってこと？ ちゃんと『受け取った』と言えば、のりみかが青いランドセルを探す必要はなかったはずじゃない。どうして、熱田君は黙ってたの？」

「銀河さん、やっぱり『男心』というものがわかっていないねえ。その点において『だけ』は、御器所君のほうが理解しているようだ」

やはり、ぼくには、まったく話が見えていない。

「えーと、全然理解してないんだけど……。要するに『青いランドセル事件』の犯人は……則武さんだった……んだよね？」

不老翔太郎と金銀河が、ほぼ同時に、似た調子で大きな大きなため息をついた。

「さっきのあの二人で一目瞭然でしょ！」

金銀河の呆れた様子の子の声をぶつけられ、ぼくは、虹色であったはずの脳細胞を懸命に回転させた。

そして、ゆつくりと、言った。

「いや……ホントに申し訳ないんだけど、ちょっと待ってね。つまり、則武さんが熱田君のランドセルに……えーと、体育の着替えの時間に、こっそりとラヴェターを入れた。けれど……その直前に、うちのクラスでは唐突に、萱場先生のおかしな気まぐれで、席替えが行なわれてしまった。そのことを知った則武さんは、ほんとうは熱田君のランドセルに入れるつもりだったラヴェターを、誰かほかの人のランドセルに入れちゃったんじゃないか、って心配になっちゃった……だから、体育の着替えの時間を利用して、教室にある青いランドセルを探って、ラヴェターを探した……ということ、よろしいでしょうか？」

返答はなかった。ただ、不老翔太郎と金銀河の顔が「死ぬほど退屈だ」と雄弁に語っていた。ぼくは、自分の虹色の脳細胞の整理整頓のために、あえて続けた。

「でも、実は則武さんの想いのとおりに、ラヴェターは熱田君のランドセルに入れられていた。席替えがあつても、偶然にも熱田君は同じ席になつたから。当然、熱田君もそれを見つけていた……熱田君は、やっぱりこういうことは恥ずかしいから、みんなには言わなかつた。でも、実はやっぱり二人は、つまりその『両想い』だった……っていうのが、『青いランドセル事件』の真相だったんだ……よね？」

しばし、沈黙があつた。その後、破裂するような笑い声を不老は上げた。

「いやあ、御器所君！ さすがだよ。君もずいぶん成長したね」

褒められているのかけなされているのか、どうもよくわからない。まったくうれしくもなんともなかつた。

金銀河も綺麗な笑顔を見せていたけど……それは喜んでいいのだろうか？

不意に、不老翔太郎は真顔に戻つた。

「さて、喜んでばかりはいられない」

言うなり、今までまったく無視していたはずの北門の外へと足を踏み出した。早足で歩き出す不老を、ぼくは追いかけた。

呼びかけようとしたその瞬間、不老翔太郎は、熱田博和と則武美花が手をつないで去つた方向とはまったく逆を向いた。

「また、会いましたね。あなたがおっしゃつたとおりだ」

ぼくと金銀河は、同時に振り向いた。

北門の向かいに建っている古びた五階建てのマンションのエントランス・ホールから、深紅のつなぎの皮ジャケットを着た長身の男がゆつくりとした足取りで、路上に姿を現した。

「不老君、だつたね。君に見破られるとは、プロの探偵の俺も形無しだな」

まさに不老の説明どおりの、平針左京の姿があつた。

不老翔太郎は、平針左京に一步近づいた。

「簡単な推理ですよ、平針さん。この北門の近くに、職員用駐車場があります。萱場先生のバイクも、そこに停められている。平針さんが今日もまた萱場先生の尾行をすることは十二分に想定できます。だから、この付近に隠れているはずだ、と思っていました。しかし、平針さんのバイクは——その服と同様——とても目立つ。この近くに停めていたら、すぐに萱場先生にバレしてしまう。では、その派手な真っ赤なバイクをどこに隠すか？」

不意に、金銀河が声を上げた。

「そうか、『木の葉を隠すなら、森のなか』っていうことね、不老君！」

ん？ どういうこと？ ぼくには理解できなかつたけれど、いつものようにぼくの存在は完全

に無視された。不老はにやりと笑い、言葉が続けた。

「そのとおりだよ、銀河さん。バイクを隠すなら、駐輪場。北門を見張ることのできる駐輪場といえば、このマンションにしかない。古いマンションでオートロックではないから、誰でもエントランス・ホールに入れる。そして、裏手の駐輪場へも簡単にアクセスできる……」

平針左京は、両の手のひらを上に向け、肩をすくめた。なんてこった、何度も間近で見たポーズだ。

「Oops! これはこれは少年探偵の名推理だ」

すると、金銀河も一歩前へ進み、不老に並んだ。そして、平針左京に向かって言った。

「いったい、あなたは萱場先生の何を知っているんですか？ あなたのせいで、萱場先生はとても苦しんでいるんです」

そうか、鈍いぼくでもやつとわかった。このところ、萱場先生が気まぐれな席替えをしたり、チャイムよりも前に教室に現れたり、逆に遅れて現れたり、授業中にミスを連発したのは、やはり「何か」を抱えて、さらに平針左京に追われているからだだったのだ。

平針左京は、変わらず薄い笑みを浮かべていた。

「君たちの知っていることも、知らないことも、知らなくていいことも、たくさんある。これでも俺は、かつては教壇に立っていたんだぜ。生徒に何を言っているのか、よくないのか、教壇を降りた今でも、そのくらいはわかっているよ。さて、今日は退散することにしよう。無論、諦めはしないがね」

平針左京は、くるり、とぼくたちに背を向けて、マンションへ向かって足早に歩き出した。そのときだった

「わたしの生徒に二度と近づかないで、平針君」

平針左京は固まった。逆にぼくたちは一斉に振り返った——萱場先生だった。

腕を組み、授業中に今まで見せたことのないような毅然とした表情で、平針左京をにらみつけていた。まるで別人だ。

「わたしには、生徒を守る責任があります。不審者として通報してもいいんですよ」

唐突に、平針左京は笑い出した。

「やっぱり変わってないところもあるんだな、千種……いや、萱場先生。それに、いい教え子に恵まれてるな。けれど、俺は諦めないよ」

平針左京は、またしても、くるり、と振り返った。そして、その姿はマンションのエントランスに消えた。

「みんな、怖い思いをさせちゃったわね。もう大丈夫だから、気をつけて帰りなさい」

何ごともなかったかのように、萱場先生は言った。

「でも……先生は……」

金銀河が言いかけたが、すぐに口をつぐんだ。そして顔を上げて萱場先生を見つめると、はつきりとした口調で言った。

「わたし……わたしたちは、先生のことを信じてます」

そのとき、エンジンの重低音が響き渡った。

平針左京の乗った大型バイクがマンションの脇から現れた。ほんの数秒の間に、ぼくたちの目の前を走り去り、その姿は消えてしまった。

少しの間があつてから、萱場先生は微笑んだ。

「ありがとう、金さん。わたしも、みんなの期待を裏切るようなことは絶対にしないし、もっと

いい先生になって、あなたたちの卒業までしっかりと見守る。約束します」
そう言うと、萱場先生は職員室の入っている「管理棟」へと歩き出した。
ぼくは、不老を見やった。

「熱田君と則武さんは、もういないね。もつとも、我々の口出しすることではないけれど」
不老は二人が去った方角——平針左京が走り去ったのと逆のほう——を見ていた。

「ねえ、不老、萱場先生は——」

ぼくが口を開くと、すぐさま金銀河に遮られた。

「先生は、わたしたちを信じてくれてるんだよ。わたしたちが先生を信じないでどうするの？」
何も言葉返せない。

「さて、帰ろうか」

不老は言った。

ぼくは北門から左右を見回した。熱田博和と則武美花の姿も、平針左京の姿も、もはや見えなかった。
しばらくぼくは立ち尽くしたまま、無人の道路を見つめていた。

「青いランドセル」完